図書館だより No. 7

平成 28 年 11 月 25 日

「今年はなかなか秋が来ないなぁ」なんて思っていたのに、気がつけばもう冬の気配を感じる寒さとなってきました。温かな食べ物で体を温めたい季節ですね。みなさんの冬の定番となる一品は何でしょうか。

さて、埼玉県では毎年12月に「図書館と県民のつどい」という催しが行われています。今回の日時と会場は、【12 月 18 日（日）10 時～16 時　北本市文化センター】です。県立図書館だけでなく、大学図書館や高校図書館の活動を紹介した展示ブースがある他、当日は人気作家　石田衣良さんの記念講演やビブリオバトル（知的書評合戦）が行われます。石田衣良さんの記念講演はホームページから事前申込が必要ですが、まだ空きがある模様。ビブリオバトルの観覧は当日先着順です。バトラーがおすすめの本の魅力を5分で語り、観覧者の投票で一番読みたくなった「チャンプ本」を決めるスポーツのような書評会で、みなさんも白熱した時間を過ごしてみませんか。バトラーは県内の中学生・高校生です。今回は一体どんな本が「チャンプ本」に選ばれるのでしょうか。

＊熱々に幸せを感じる料理

596-オ 『グラタンレシピ』　太田 静栄 ‖ 著　 柴出版

エビやイカなどの魚介を使ったもの、ナスやジャガイモなど野菜を使ったもの、ミートソースを使ったものなど、馴染み深い定番のグラタンだけでなく、「ミートボールのスパイシーグラタン」、「鶏肉ととうもろこしのグラタン」、「長芋と明太のグラタン」など、おいしそうなグラタンのレシピがたくさん載っています。

「ししゃもとトマトのみそグラタン」や「豚肉と根菜の和風グラタン」といった和テイストのグラタンや色々な野菜を器にし、丸ごと食べられるグラタン、デザートグラタンなど多彩なアレンジのグラタンレシピも気になります。さあ、今晩はどんな具材でグラタンを作りましょうか。

＊心がほっこり温まる

913.6-イ 『チッチと子』　石田 衣良 ‖ 著　 毎日新聞社

10 歳になる息子のカケルとふたり暮らしを送る青田耕平。職業は作家。今は息子との生活を題材にした連作『チッチと子』を書いているところだ。しかし、本はなかなか思うようには売れてくれない。作家仲間と自分を比べて落ちこんだり、これからの暮らしを想像して不安に陥ったり、亡き妻への積もる想いが胸をよぎったり、いつも悩みは尽きない。そんな耕平を誰よりも支えてくれているのは、守ってやっているつもりの息子カケルだった。そんな健気で心優しい息子に励まされ、不器用で、ちょっと頼りない耕平だけど、作家として、父として、奮闘していく。

蔵書点検が始まります

図書館閉館期間

１２月６日（火）～１２月２１日（水）

今年も上記の期間、図書館は蔵書点検を行います。蔵書点検では、図書館で所蔵している本が行方不明になっていないか、きちんと正しい場所に配架されているかを確認します。そのため、蔵書点検の期間中の図書館は本を移動しないよう**閉館**します。なお、閉館中もコピー機の使用と本の返却は可能です。みなさんには、不便をかけてしまいますが、円滑に蔵書点検が行えるよう協力をお願いします。また、記念館自体は通常どおりに開館していますので、生徒ホールやピアノ室を利用することは可能です。

蔵書点検に伴い、みなさんにもうひとつお願いします。

本を延滞している人は蔵書点検までに必ず返却してください。

『ビブリア古書堂の事件手帖』 特別展と鎌倉を楽しもう

『ビブリア古書堂の事件手帖』は鎌倉の古本屋を舞台に、古書にまつわる謎と秘密をこの店の店主、栞子さんが解いていくというもの。現在は6巻までが刊行されています。コミック化、ドラマ化もされている人気の作品で、2012年には年間ベストセラー文庫総合第一位を受賞するなどしています。そのビブリア古書堂の特別展が、鎌倉で行われています。鎌倉の町めぐりも兼ねて、足を運んでみてはいかがでしょう。

会場：鎌倉文学館

期間：10月1日（土）～12月11日（日）　※10月3日（月）、11月14日（月）、12月5日（月）は休館

入館料：一般400円　小中学生200円

開館時間9：00～16：30　※入館は30分前まで

B913.6-ミ-1 『ビブリア古書堂の事件手帖』　三上 延 ‖ 著　 アスキーメディアワークス

本に対して奇妙な体質を持つ大学生　五浦大輔と、内気であがり症、だけど、本のことになると別人のように話し出すビブリア古書堂の店長　栞子。二人は、大輔が祖母の遺した『漱石全集』を栞子の店へ持ち込んだのをきっかけに出会うのだが、そこで栞子は　『人の手から手へ渡った本そのものに、物語があると思うんです』と、鋭い観察眼を発揮し、祖母の本に秘められた謎と秘密を解き明かす。栞子の話す本の話に魅かれた大輔は、栞子の誘いを受け、ビブリア古書堂でアルバイトを始めるが、そこには大輔の持ち込んだ本のようにいわくつきの本が次から次へと舞い込んでくる。

ニッポン再発見

ニッポン再発見もいよいよ後半、西日本へと進んできました。第6回の今回は関西（大阪府、京都府 、兵庫県、滋賀県、奈良県、和歌山）の2府4県です。たこ焼き、お好み焼き、串揚げ屋が連なる食い倒れの街 大阪、世界遺産をはじめ、数多くの国宝、重要文化財を有する古都京都、宝塚歌劇団や姫路城が有名な兵庫、日本一の湖 琵琶湖やゆるキャラ“ひこにゃん”でもお馴染みの彦根城を有する滋賀県、世界に誇る神社仏閣を数多く有し、奈良公園の鹿が大人気な奈良。真言宗の総本山 高野山や真っ白な砂浜が広がる白浜を有する和歌山県。行ってみたいと思える魅力がどの府県にもたくさんです。今の季節には、神戸ルミナリエ（兵庫）、京都イルミネール（京都）、OSAKA光のルネサンス（大阪）などのイルミネーションを観に行くのもいいですね。

＊その味を一度は味わってみたい

625-タ 『奇跡のみかん農園』　谷井 康人 ‖ 編　SBクリエイティブ

和歌山県有田郡湯浅町にある谷井農園という小さなみかん農園。小さいながらも、化学肥料や農薬を使わず作った糖度の高いみかんには予約が殺到し、そのみかんで作ったジュースは名立たる高級ホテルが仕入れをしているのだそう。そのおいしさは谷井農園三代目の谷井康人さんのみかん作りにかける思いから生まれました。谷井さんが目指したのは、「見た目の綺麗なみかん」ではなく、「美味しいみかん」を作ることでした。徹底的な研究のもと、土台となる土の質を高め、肥料も一本一本その量を見極めて必要なだけ与え、不自然じゃなく、本当に甘いみかんを完成させます。そのこだわりはジュース作りにおいても同じ。おいしいみかんをお客様に届けるために労力も費用も惜しまず全力を尽くす谷井さんの姿に心打たれ、谷井農園のみかんを食べてみたくなります。

今年２０年に一度の式年造替を迎える春日大社＊

175-カ 『歩いてめぐる春日大社』　春日大社 ‖ 監修　扶桑社

東大寺と同じ「奈良公園」エリアにある春日大社は、全国に3000以上ある春日神社の総本社です。その歴史は奈良時代から始まり、1998年にはユネスコ世界遺産にも登録されています。神の使いと言われている鹿が姿を見せる自然豊かな境内を歩くと、その神聖な空気に心が浄化されていきます。近づくにつれ、緑の中から見えてくる朱塗りの社殿も見事な美しさ。時を忘れて、いつまでも佇んでいたくなります。その春日大社では今年、20年に一度の式年造替（しきねんぞうたい）が行われました。

この本では春日大社の歴史、参拝の仕方、境内のおすすめの歩き方、年中行事に加え、式年造替についても触れられていて、春日大社を知るのにもってこいの本です。豊富に掲載された写真を眺めているだけでも心癒されます。きっとこれを読んだら、春日大社へ足を運びたくなるはず。

＊世界中が湧きたった一大イベント

606-ヒ 『大阪万博』　平野 暁臣 ‖ 編　小学館

1970年、高度成長を遂げた日本で行われた「大阪万博」 183日間で6400万人が会場へと訪れたという「大阪万博」の名前や岡本太郎の制作した「太陽の塔」の名前を今も私たちはよく耳にしますが、その全貌については知らないことも多いです。2018年には太陽の塔の内部が一般公開される予定でもありますから、この機に当時の様子を記録で追って、大阪万博をもっと知ってみましょう。本を開いて、まず感じるのは大阪万博が戦後最大という名がぴったりの本当に大きなイベントだったということ。日本国内だけでなく、世界中から訪れた人々の熱気を写真から感じます。そして、胸躍るパビリオンの数々に「行ってみたかったなぁ」という気持ちが湧き起こります。会場で提供されていた食事メニュー、1日ごとの天候や来場者数などといった記録も興味深いです。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

『蜜蜂と遠雷』（913.6-オ　恩田陸）を読みました。一言で言うならば、読んでいて、とても心地が良くて、いつまでも読んでいたくなる物語。温かくて、優しくて、綺麗。どのページを読んでいても本から音楽が聞こえてくるような感じがして、心癒されました。

国際ピアノコンクールに出場する4人のコンテスタントにスポットをあて、物語は進んでいきます。天才少女と言われながらも突然ステージから去っていた少女の復活、素晴らしい音楽の才能とスターとしての華を合わせ持つ青年の勇姿、音楽界の伝説的な存在ユウジ・フォン＝フォフマンが「ギフト」と呼ぶ未知数の少年の登場、社会人として夫として父として生活しながら「生活者の音楽」を奏でる青年の挑戦。どのコンテスタントもそれぞれの想いをのせて愛する音楽を奏でています。その気持ちがひしひしと物語から伝わってきて、コンクールを聴きに行っている一人になったような気持ちで熱いエールを送りながら読みました。ぜひみなさんにも読んでほしい。【今井】

『ハリー・ポッターと呪いの子』（932-ロ　J. K. ローリング）を読みました。

これはこの夏イギリスで上演されたお芝居のシナリオです。主人公はハリーの息子、アルバス・セブルス・ポッターです。ハリー・ポッター好きの人のなかには、なんだぁと残念に思う人もいるかもしれませんが、早とちりしないでください。なんと、ハリー、ロン、ハーマイオニーも出てくるし、さらにジーニー、マルフォイ、マクゴナガル先生にスネイプ先生も出てきます。しかも意地悪スネイプ先生ではなく、ハリーのためなら自己犠牲をいとわない泣かせるスネイプ先生です。ああ、ネタバレしたい。マルフォイだって、マルフォイだって！！この気持ちを誰かと早く語り合いたいです。同じ気持ちの人、図書館に来てください。

しかし、早く読みたくて英語版を買ったものの、第1幕第9場まで読んだところで日本語版がでてしまいました。結局、日本語でしっかり最初から読みました。もっと英語力をつけたいものです。　【鈴木】